

第1回団体・事業者ヒアリングの開催結果について

平成26年8月1日（金） 13:30～15:30

ながくてエコハウス 多目的室

1 出席者（敬称略）

A グループ

住民団体	伊藤 まゆみ	希望の会
	福本 喜一	要約筆記長久手
事業所	竹神 清史	特定非営利活動法人楽歩
	徳田 優太	社会福祉法人むそう
	長谷川 公子	ヘルパーステーションあんのん
大学	野村 こはる	愛知県立大学 学生
	富田 悠仁	愛知県立大学 学生

B グループ

住民団体	山口 恭美	ほっとクラブ
	佐藤 深雪	希望の会
事業所	燈明 泰伸	社会福祉法人あいち福祉会たかぎ作業所
	小松 史枝	特定非営利活動法人楽歩
	小島 いさ子	株式会社フォルツァ

C グループ

住民団体	鈴木 厚子	ウエンディの箱
	徳山 みつ子	要約筆記長久手
事業所	横倉 裕子	社会福祉法人むそう
	竹田 晴幸	特定非営利活動法人百千鳥
	近藤 想	愛知たいようの杜ヘルパーステーション ひだまり

コーディネーター

吉川 雅博	愛知県立大学 教育福祉学部社会福祉学科 教授
-------	------------------------

長久手市役所

清水 修	福祉部次長兼福祉課長
近藤 かおり	福祉部福祉課 課長補佐
加藤 信子	福祉部福祉課 障がい福祉係長
宇井 正幸	福祉部福祉課 主事

コンサルタント

秋山 東洋雄	(株)創建環境エンジニアーズ
--------	----------------

2 概要

現在、福祉課では、長期的な障がい福祉政策の方向性を示した「障害者基本計画」と障害福祉サービスの数値目標等の短期的なあり方を示した「障害福祉計画」の2つの計画の策定を進めています。今回、日頃障がい者の方々に接している皆さんが、“感じている事”や“想い”などを伺うため“ワークショップ”によるヒアリングを企画しました。

今回、障害福祉で大きな課題となっている、「障がい者が生まれ育った地域で暮らしていくために」ということを全体のテーマとし、グループ毎に個別のテーマを設定しました。

全体のテーマ【障がい者が生まれ育った地域で暮らしていくために】

Aグループのテーマは、【児童への支援方法について】

Bグループのテーマは、【就労支援について】

Cグループのテーマは、【親なきあとの支援について】

くじで3グループに分かれてもらい、各グループごとに設定したテーマに関する課題を抽出していただきました。障がい者の一生について考えていただきたいという想いから、テーマは、Aグループが子ども、Bグループが成人、Cグループが高齢のものとし、グループごとに課題を紙にまとめてもらいました。

3 ワークショップ

《Aグループ》

長久手で生まれ育った子ども（障がい児）が地域で暮らしていくために 《児童への支援方法について》

【本人の支援】

- ・できることをふやしてあげたい
- ・障がいがあってもなくても同じ経験ができる
- ・外出方法（自家用車以外）
- ・興味、関心が広がるのが難しい
- ・虐待 お父さんとお母さんが私をいじめる…。ご飯が食べれない…。
- ・医療ケア
- ・病気になった時の預け先

【親の支援】

- ・情報が無い
- ・学校はどうしよう。登校下校。
- ・働かないと生活もできない。本人の支援もあるしどうしよう
- ・健診後の不安解消は
- ・発達が遅いといわれた。どうしたらよい？
- ・保育園もダメ、幼稚園もダメ。どうしよう…
- ・相談相手
- ・母親教室での障がい認知
- ・福祉サービスって何？

【環境】

- ・交通機関
- ・居場所（不登校）
- ・校区ごとに支援が違う
- ・友だち（障がい理解）
- ・遊び（よか）
- ・フリースクールがない。設立を！
- ・日中活動
- ・児童の面倒に一般人を活用
- ・学校に先生以外に専門的な支援のできる方は…。

【きょうだい支援】

- ・兄妹のことも世話しなきゃ…。時間がない…。

【希望の会】

- ・同じように悩んでいる人がいるなら…

【行政支援】

- ・市町によって受けられるサービスが違う
- ・個人情報。困った人をどうやって見つける。

【将来】

- ・進学。小、中、高→大
- ・大人に向けて卒業後はどうしよう

Aグループでは、“児童への支援方法”について話し合いました。まとめとしては、“本人に関する支援”と“親に関する支援”“兄弟に関する支援”について、各課題点を挙げていきました。

【本人に関する支援】については、例えば、「できることを増やしてあげたい」、「障がいがあってもなくても同じ経験ができる」ようにしたいが、外出方法や興味・関心を広げることの難しさが挙げられています。

【親への支援】については、「子どもが障がい児と知ったときに、誰に相談したらいいだろう」とか、「同じような問題を抱えている人はいるのか」、「ヘルパーサービスとは一体何か」、といった相談に関する課題や不安解消に関する意見がありました。

【兄弟支援】については、親は、障がい児本人への世話で余裕がなく、世話はしたいけれど時間がない。

その周りの要素として、【環境】がありますが、「居場所がない、日中どうしたらいいんだろう、将来進学できるのか」などの課題が挙げられました。

そして、それ全体を「誰が支援していくのか」ということですが、グループ中では、【行政支援】が挙がっており、その中の課題としては、市町村、学校などで、「受けられるサービスに違いがある」という意見でした。

本人を主体として考えて、時系列に並べてみましたが、「乳幼児期から支援を始めないといけない」という事が見えてきました。また、支援の多くは、本人に支援することで、本人だけではなく、親や兄弟への支援になるということです。以上です。

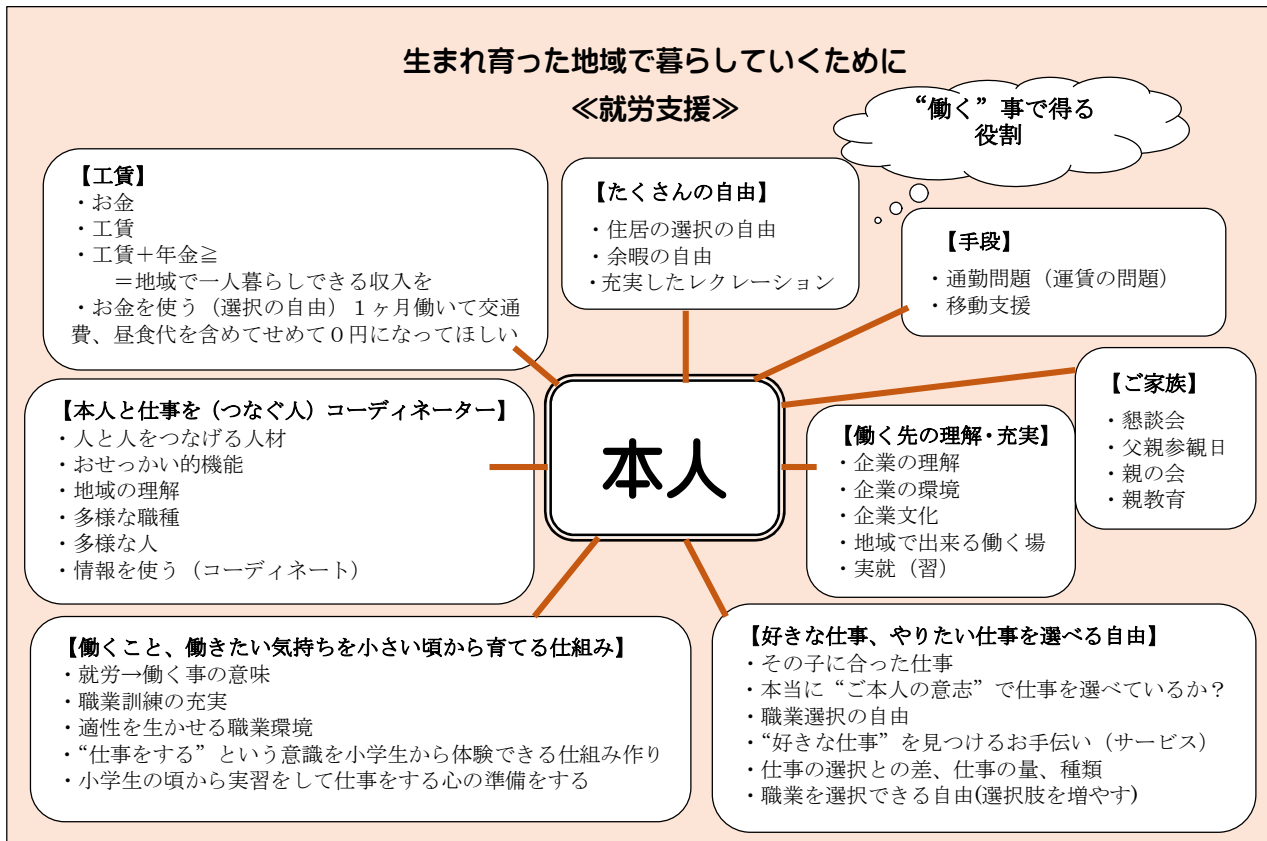
【コーディネーター】

個人的な見解としては、もし（支援対象者が）子どもの時期であれば、支援のメインは、“親への支援”だと思っています。親がしっかりしていないと、どうしようもない。特に親が、「（子どもの）障害を受け入れない」場合も含めて、親さえしっかりしていれば、何とかなるのではないかと。従って、親の支援は大切です。

それと、学校に行きますので、福祉の方から教育の方へ、何か変える努力を強力にしないといけない。個人的には、スクールソーシャルワークをやっていて、スクールソーシャルワーカーの設置の働きかけをしておりますが、教育と福祉は、密接な部分があると思いますので、子どもの時期は、教育を抜きにして何も考えられない。また、日中は学校に行っているわけだから、そこで、それなりの扱いを受けないと意味がない。それは十分感じました。



《Bグループ》



Bグループは“就労支援”についてです。“本人主体”で考えました。各見出しに書いてあるのが、“必要なもの”、“就労で得られるもの”です。

まずは、「本人の仕事を探すコーディネーターがいるのではないか」という課題には、ジョブコーチ〔職場適応援助者〕という資格を持った者ではなく、地域の方〔となりのおばさん〕でも良いではないか、という意見が出ました。

また、学校を卒業する時に、いきなり「働きましょう」と言われても、“働く”ことの意味が理解できないのではないかと、という課題には、“働くこと”や“働きたいという気持ち”を小さい頃から育てる仕組みを作ってはどうか。仕組みを作ること、少しずつ働くことへの意識を育てることができたら、より働きやすくなると思います。

それと、「好きな仕事は何ですか」と聞かれたときに、答えられる方はごく少ないと思いますが、その仕組みがあると、好きな仕事、やりたいことを選べる自由意志が育つのではないかと。“自由に選択できる”仕事の多さも必要ですが、やはり「やりたい」という本人の気持ちが一番大事なので、“自由意志で選択できる”という意味の自由を二重に入れたい、という意見も出ました。

「働き先の理解・充実」については、障がいの方への理解が乏しいが為に、企業への就職につながらない場合が多いという考えから、理解が進むような仕組みを作ったら良い。

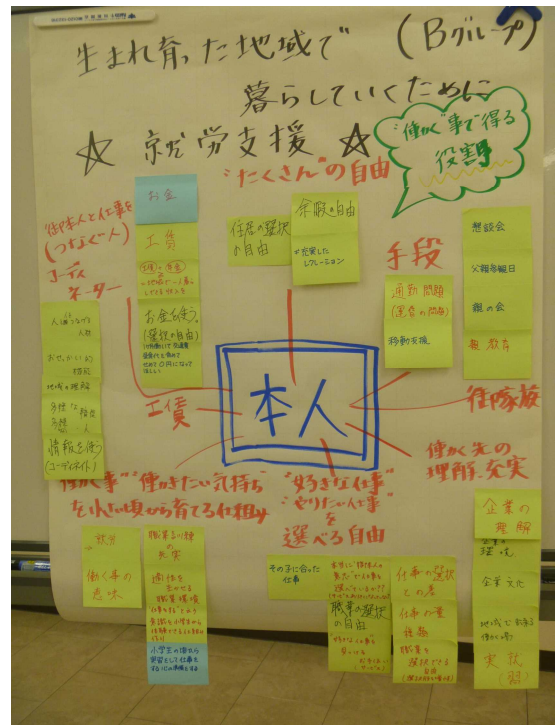
あとは、家族の理解や通勤手段への課題が挙げられました。

あと、「働くことで得られる多くの自由が、大事ではないか」という課題については、一人暮らしを希望する方も考えると、工賃が充実していくことも重要です。しかし、工賃が充実するだけでは、心の自由は満足できない。働く事で大事なことは、「働いている」、「何か役に立っている」という役割かと思います。以上です。

【コーディネーター】

働くとなると、就職先は必ずしも企業だけではありませんが、おそらく、企業が一番だと思います。障がい者雇用率を下回る事業者へのペナルティーが、従業員 100 人超えも対象になりますね。法律の改正などを考慮すると、企業への理解・周知が、一番早いのではないかと、個人的には思っています。

「小さい頃から働く」というのは、今、“人口減”というのもあって、ニートをフリーターで雇用、国としては「働ける者は全部働かせる」という施策が動いています。長久手市でも子どもの職場体験をやってはいますが、私は、「親の職場を見せるのが一番良いのではないか」と思っています。いずれにしても、私もキャリア支援室長をやっていますが、大学生も同じで、なかなか“働く”というのも、難しいというところです。



《C グループ》

障がい者が生まれ育った地域で暮らしていくために 《親なきあとの支援について》

【24H365日支援】

- ・高齢の方と障がいのある人や若者、学生とのシェアハウス？（お互いウマがあう）
- ・援助が必要な人は施設しかない？
- ・医療処置が必要となった時、看護師が訪問するが、看護師不足の状況の中、適切・適正な処置を受けることができるか？
- ・重度の人は自宅で生活できない？
- ・身体（特に重身）に障がいがある人でも、サービスを24H/365日利用しながら生活できる地域。（他の障がいも同様に）

【地域の理解】

- ・ノーマライゼーション社会になれば良い
- ・障がいや差別（虐待）の理解を深める。☆啓発
- ・近所に障がい者がいてもわからない
- ・（地域の支えを得るために）地域に存在を知ってもらえているか？

看取りは誰が？

【【人のつながり】愛想よく！】

- ・近所づきあいのコーディネート？
- ・本人と他人をつなぐ人の存在が必要（だれ？）
- ・知り合いをつくっておく
- ・人の縁をつないでおく
- ・こころの拠りどころになれる人？親友？孤独感を無くすために
- ・児童から大人になっても安心して住み続けられるよう、サポートできる一貫した支援のある地域（児童相談～成人相談）
- ・地域の人も自然に関わりあって、生活していく地域（自治会、地域行事等）→防災の観点からも
- ・愛想良く生きていこう！！

【わかるけどほっとけないぞ】

- ・ひきこもりの人に対してのアプローチ？！
- ・おせっかいなおばさんに
- ・相手が隠したいと思っている場合どう接していくのか

【ちょっと支援があれば…】

- ・少しの援助（複数日）があれば、自立して生活できる人へのケアは？
- ・成年後見人制度を活用する
- ・1人で出掛けても安心して出掛けられるシステム作り（地域）
- ・親御さんとのみ出掛けるだけでなく、自由に旅行や好きな趣味ができるような移動支援の充実

【親なき前】

- ・精神の方で、50代になった時に問題が起こる事が多い。それは、それまで見守っていた親御さんが見守る力が弱ってきたことによる。本人の意向というものの、大変になってから施設入所させることが、余儀なくされる場合がある。本人が宿泊訓練できる資源が必要。
- ・親御さんが元気なうちにサービスを使っとく

【ソーシャルストーリー】

- ・親なきあとよりも親なき前の行動がその後の暮らしをイメージできるようにする必要がある
- ・ソーシャルストーリーを学べる場をつくる

Cグループは“親なきあとの支援”についてです。“支援者男性チーム”と“近所のおばさんチーム”に分かれて、ワークショップを始めました。

“親亡き後”とは、「本当に“親亡き後”なのか」、「親亡き後」に考えていては遅いねという見解で、皆共通していました。

支援者チームでは、実際に24時間365日のサポートがあれば、親が今までサポートしていたところをカバーして暮らせるのではないかと。1日に複数回の生活支援と移動支援（お出かけ、旅行など）があれば、親亡き後も生きていけるのではないかと。“成年後見制度”を利用することで、少しずつの支援でそのまま自宅で暮らし続けられる場合もあるのではないかと、という意見でした。

“地域のおばさんチーム”は、やはり、幼い頃から知ってもらって、知り合いを多く作っておくことが大事であり、自治会や地域行事の中に率先して入って、子どもから大人になっていっても、継続的なサポートを受けながら、他人の中で繋がっていけば大丈夫。そのためには、人と接する時は、愛想よくしていないと、嫌われてしまいますよ。という意見がありました。

その中で、近所との付き合いを続けながら、人との縁を繋いでいこうとした時には、繋いでくれる人が必要ですが、「それは誰だろう」という課題が残りました。本人や親も頑張っているだけで、それには地域の理解も必要です。“障がい、差別や虐待につながるケース”や“家族が批判を受けて、家族間の虐待が起こるケース”、それに無関心な人もいると思うので、やはり、ノーマライゼーションの社会を、もう1度見直した上で「障

がいの有無に関わらず、人生の最期が保障される」という地域の理解が必要ではないか、という意見も出ていました。

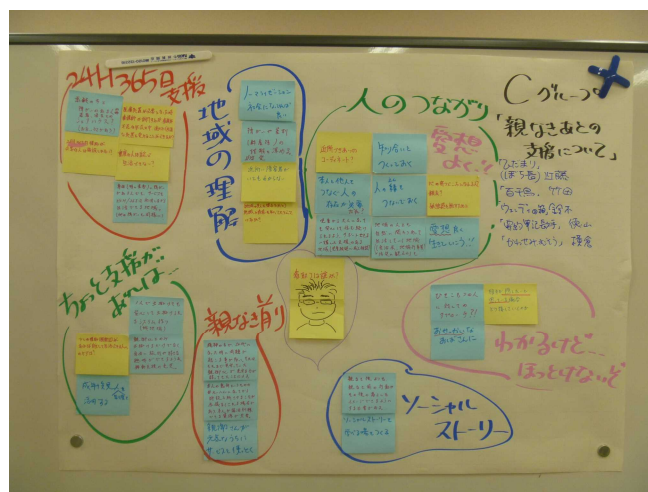
先ほど、「親亡き後では遅い」と言ったように、(本人が)50代になってから、“親の介護力が下がって、問題が大きくなる”というケースがあるので、親が元気な時から支援と繋がって、サービス使って、暮らしの練習をしてもらう。その時ソーシャルストーリー(一般的にはこうだよ)を、きちんと教えてくれる人・場所が大事です。よくあるケースが、「引きこもっていて何が悪い」、「ゴミ屋敷で何が悪い」、という本人。分かりますが、「ほっとけないよ」、「一人になるよ」、「あなたの介護、看取りは誰がする」ということをテーマに、こういった支援があれば、最後は笑えると思います。以上です。

【コーディネーター】

少し話がでましたが、フォーマル(公式)な形と、インフォーマル(非公式)な形について、その両方をしっかり考えないと、そろそろいけないと思います。(国は)高齢者の“地域包括ケア”を提唱して、結局は“助け合い”を言い出しているのです…。

障がい者もきっとそうなるということを見越して、フォーマル版とインフォーマル版を考えた方が良いでしょう。それは、「地域をどうする」といった、地域づくりのような内容も関係してくるかと思います。

また次回、この続きをぜひお願い致します。



4 次回について

今回抽出していただいた課題に対する解決策を、次回のワークショップで話し合ってください。

＜次回：平成26年9月5日(金) 13:30~15:30 ながくてエコハウス多目的室＞